に考えられる根拠はあるのではなかろうか。（もちろん、こういっても、歴史上長期にわたる家内奴隷の存在に疑いをはさむのではない。）アフリカはその大部分が奴隷制という中間段階をへずに原始共同体制から封建制に発展していった明かな事例だといえそうである。

考古学的資料により解決される

K・G・ヘア
(K. G. Hare)

『マルキシズム・ツディ』誌一九六一年七月号に出たR・ジャーディンの「社会の発展段階」という論文は、さまざまの意味で興味深い。マルクス主義者のうち、社会の発展諸段階は直線的な前進をつづけるなどといったものが今日までにいたかどうか、特にマルクス自身そのように主張しことはないのではないか、一つの発展段階はきまりきった仕方で次の段階へ自動的につづくものではない。社会現象の性質そのものが、このような発展コースを排除する。いずれにせよそうした発展路線いいかがわしくてブルジュワジーお好みの神の計画の不可避の発展みたいだ。

社会の発展段階の数とタイプを決定する問題は、文字のなかった先史社会の種々の文化類型に年代順をあてはめていく問題と異ってはいない。いまわれわれの当面している問題も考古学上の資料によって終局的には大巾に解決されるであろう。

ジャーディンは論文のおわりの数段で、われわれは世界をかぎられた目でみているようだ。すなわち近代資本主義の西欧世界と、もうひとつ歴史時代の世界、この二つだけを見ていたにすぎないようだとのべ、本問題の解決にいたる道をしめしている。

エンゲルスは『家族、国家、私有財産の起源』のなかですでに当時の考古学の重要性が大きいこと、考古学上の資料の一部は社会発展段階にかんするマルクス学説を支持しており、そこが当時のブルジュワジーの拒否するところとなっていたことに注意をもとめている。学問上よくあるように、エンゲルスは自分の到達した結論の多くが別人によっておなじように到達されていたことを知った（ここではモルガンの『古代社会』）。

この両名は例の発展諸段階が存在することを考古学的に主張する。G・チャイルド教授はもっと後の人であるから、さらに力づよい支持をマルクス学説にあたえた。同教授はそのライフワークとなった『社会の進化』のなかで、旧石器、新石器、青銅、鉄器という考古学上の大きなカテゴリーに、それらの段階のなかで見うけられる種々の文化をもった社会組織をあてはめる。かれは考古学上の資料（明らかにところどころ大まかなところのある資料）をもちいて、先史社会のいわば社会的な層といったものの存在をにおわす証拠をさがしだし、ついに埋葬の少くとも二つのタイプ――その一つは数は少いが埋葬品の多いタイプ、もうひとつは数は多いが埋葬品のとぼしいタイプ――の存在をほのめかす資料を、クレタ島文明のなかに発見した。伝統的に文化の異同を明示するとされている陶器のような種々の製作品が存在するので、この両埋葬タイプは同じ文化にぞくしていることがわかった。

アッシリヤ、エジプトの河岸文化においても、なんらかの形の社会的層形成をしめす印象的な資料がある。この点ではアッシリヤの資料はよくそろっている。上古メソポタミヤの社会学的資料をみてもっとも興味があり、またこの論争にとってあつらえむきの特色の一つといえるのは、地質学的層形成のいっそう高い水準、またかなりの経済活動の発現をあらわしている水準では戦争のあったことをしめす資料がこのほど発見されたことである。

チャイルド教授は、モルガン、エンゲルスにならって考古学上の資料を、野蛮、未開、文明の三段階にむすびつけ、文明への途上自然環境をいちじるしくことにしながら通過してきた継起的諸段階を決定する。同教授はこれらの段階の次から次への移行は、あらゆるばあいを

通じて同じ時にはかならず同じ過程になるとはかぎらないことを示そうとしてかなり工夫をこらしている。なるほどわれわれの住む欧州やソヴェト領アジア、北米は進んだ鉄器時代にあるが、オーストライア原住民は旧石器とおぼしい時代にいる。このことは考古学的には自明である。同志ジャーディンはマルクス主義の社会学説を歴史的限界をこえた太古にまでさかのぼらせることの必要に気付き、近代の骨格構造をあとづけ説明しようとこころみる旧石器時代解剖学者がしているように、可能なところから人類社会の進化の輪廓をえがきださねばならないと語っている。私はかれが前記エンゲルスの『家族……の起源』にふれないのはなぜなのかと奇異に感じたが、エンゲルスは初版（一八八四年）の序文にすでにこう書いている。「モルガンの研究の成果を自分の唯物論的な歴史研究の結論とむすびつけて紹介し、それらの結論の意義をあますところなく明かにしようとした人こそマルクスその人であった。」ここからきわめて明かなとおり、マルクスは考古学的資料のことも、モルガン、エンゲルスの設定した発展段階のことも十分承知していたのである。

ジャーディンはマルクスの「大体において」というコトバ（ジャーディンは気がついていたらそのコトバのでてくる文章を引用してわれわれの考慮を求めることであろうのに）と、最近では教科書『マルクス・レーニン主義の基礎』の中の「全体としての人類」というコトバをよく読めばよかったのだ。このような保留は基本的な重要性をもつものと私はおもう。

われわれの大多数は、別のタイプの理論を説く近代ブルジョワ社会学者と意見をおなずくすることもあるだろう。ダーヴィニズムやあるいは相対性理論といった包括的な理論がある一方、もっと小さくてはるかに野心の少ない理論もある。後者はいっそう経験的で生のデータに近く通例データの一片ないし一小部分だけを説明するためにとなえだされたものである。マルキシズムはむしろ前者にぞくする理論であろう。マルキシズムは社会学的であれ生物学的であれ、単一な個体の進化を敍述しようとするものでなくて、むしろ大きな社会集団、諸社会、結局は人間社会そのものの趨勢と傾向を説明しようとするもので、その点ではダーヴィニズムに似ている。ダーヴィニズムも同じように単一の生物学的標本の進化を説明しようとこころみるのでなく、種ひいては有機界全体を説明しようとするものである。

そうだとすればマルクス主義社会理論とある特定の一国とのあいだに正確な同一性を見つけだせないことが時にはあっても、別におどろくにはあたらないことになる。グッドリッチ教授の説を正しいとすれば、中国では奴隷制が支配的生産形態になったことがなかったにもせよ、奴隷制は存在したし封建制に先行した、これが問題の要点である。同志ジャーディンの引例によるとニーダム博士の説では、封建制は戦争する国家間の同盟についで出現した。私は詭弁家だのと非難をうけるかもしれないが、社会の発展過程なるものを見たところ厳密そうなやり方で適用する段になると、個々の諸国家は社会発展の諸段階なるものをしめさないかもしれない。

文字のなかった諸社会の資料を検討していけば、原始共同体制、奴隷制、封建制という少くともこれらの古い諸段階にかんするマルクス学説を立証――その立証が必要ならば――するうえに有効となるであろう。資本主義の最終段階や現在の過渡的段階については正にわれわれの生きているこの現代を見つめさえすればいいのである。

ジャーディンの見解は空想的

シド・ダグラス
(Sid Douglas)

同志R・ジャーディンが論文「社会の発展段階」（『マルキシズム・ツディ』誌七月号）で中国、インドに加えた考察は、空想的でその考察のささえとなる事実というものがそこにはない。彼は同じ論文のなかで、生産様式としての奴隷制は世界中で地中海にだけ特有なもの